

飼育レポート

飼育レポート①



キリンの輸送から同居まで

飼育展示担当 柴田 典弘

2012年6月14日長野市茶臼山動物園から「カンタ(オス2歳)」が仲間入りしました。カンタの受入れに備え、事前準備として先ず取り組んだのは「リンリン(メス7歳)」を普段とは別の寝室に収容する訓練でした。約1年間単独飼育だったこともあり、おのずとリンリンの寝室は決まっていたのですが、カンタがどの寝室を好むかわからないため、年上のリンリンを別の部屋に慣らす必要があったのです。これを約1週間実施し、

どの寝室(計3室)に入っても普段と変わらない行動を見せるようになりました。あとはカンタが無事に搬入されるのを待つばかりです。

朝7時頃トラックに乗ったカンタが到着しました。搬入作業は順調に進み10時頃には無事収容できましたが、その日は終始緊張した様子で餌を食べる余裕もなく、飼育員としてカンタにとって最も落ち着く状態を選択することが求められました。室内では別の寝室に収容したリンリンの方をじっと見つめていたことから、翌日早速カンタを外へ出し、柵越しでの見合いを実施しました。2頭は、まるで今までずっと一緒だったかのような落ち着いた様子を見せました。餌を口にしなければカンタも、リンリンが近くにいる間のみ木の葉を食べたことから、早い段階での同居が理想的であることを確信し、3日目の6月16日の朝、メイン展示場での同居をスタートさせました。直後からお互いが首を摺り寄せ同居を心待ちにしていた様子で、ようやく職員も安堵感に包まれました。

当園はキリンにおいて、健康管理のためのトレーニングを実施していますが、カンタも6月下旬から開始しています。削蹄を想定した「前肢出し」を7月中旬にはマスターするなど、とても賢いキリンで、リンリンとの相性も良く、2世誕生に向けて大切に飼育しています

飼育レポート③



大家族のワオキツネザル

飼育展示担当 松井 健

大森山動物園の東側、チンパンジー舎隣に「サル舎」があります。

ここで飼育しているワオキツネザルは現在23頭の大家族。頭数が多く全頭を一緒にして管理することができないため、

今は3つの群れ、3つの部屋に分けて飼育しています。一つは4頭(オス1メス3)の群れ、もう一つは8頭(オス5メス2不1)の群れ、そして9頭(オス7メス1不1)の群れです。2頭(オス1メス1)は病気療養のため入院中です。

なぜ全頭一緒に、同じ部屋で飼うことができないのか?その理由として、飼育する部屋が狭く、全頭が入る大きな部屋が無いこと。個体同士に相性があり、特に繁殖期にはメスをめぐって激しい闘争がおこり、怪我等が心配されるからです。

また、もう一つ重要なこととして、血統管理が挙げられます。実は23頭のほとんどが血縁関係にあり、そのため、繁殖した個体に生まれついて病気があったり、体に障害があったりなど健康な子どもが育たない心配があります。

この現状を少しでも改善し、サルたちが過ごしやすい環境となるよう、今後は、隣り合わせの部屋に、オス群、メス群、繁殖群と群れの分け方を見直したいと思っています。また、展示場もガラスや出窓などを利用して、23頭の大ひなたぼっこやワオキツネザルの特徴でもある大ジャンプ、迫力ある追いかけっこなどの元気な行動をすぐ目の前で見てもらえるようにできたらいいと思います。

飼育レポート②



アフリカタゲガミヤマアラシの牛骨給餌

飼育展示担当 小嶋 夏海

野生でのアフリカタゲガミヤマアラシは、ライオンやヒョウの食べ残した骨を自分の住み処に持ち帰り、かじってリン

酸カルシウムなどの栄養を摂取しているそうです。大森山動物園での牛骨給餌は、この文献を参考に2005年から始めました。

牛骨給餌を始めてから、これまでにどのような変化が見られたのかご紹介いたします。

当園では現在、6頭のアフリカタゲガミヤマアラシを飼育しています。毎日の観察で特に気付く事は、毛並みがとても良くなったことです。牛骨をとてもよくかじる個体とあまりかじらない個体では、毛のつや光沢が明らかに違います。

次に、繁殖にも大きく関係しています。繁殖が難しいといわれているアフリカタゲガミヤマアラシですが、お母さん個体(愛称:ワヤ)は、今回の出産も含め今までに10頭以上の子どもを出産し、育ててきました。詳しいことは不明ですが、牛骨給餌がワヤの子育てに大きく貢献しているのではないかと考えられます。

当園で牛骨給餌を始めてから約7年になります。ヤマアラシたちがガリガリと音を立てながら牛骨をかじる姿はとても迫力があり、時には半日もずっとかじっている事もあります。その様子をぜひ一度目の前でご覧いただければと思います。

動物病院から

ポニー「クリン」の闘病生活

獣医師 柴田 千秋

クリンは、19歳のオス(去勢済み)のポニーで、お尻を触られることが好きという変なところもありますが、気が優しく、愛嬌のある性格をしています。そんなクリンですが、年齢も高齢になってきたためか、昨年の秋頃より体調を崩し、呼吸の状態に異常が見られ、それに伴い体重も徐々に落ちてきました。病気の原因は可能な範囲で検査をしてみました。正確には分かりませんでした。これまでいろいろな治療を行ってきましたが、完全に治すことはできず、現在は症状を軽くするために、薬を食べさせたり、注射したり、点滴をしながら少しでもクリンの負担が減らせるように治療を行っています。飼育担当者も青草を刈り取ってきて食べさせたり、栄養をつけさせるような餌を用意したり、暑い日には少しでも過ごしやすいように、日陰や風の通るような場所を選んで休ませたり、様々な努力をしてくれています。クリンだけではなく、どの動物にも言えることですが、歳をとってくると体力も落ちてきますし、様々な病気にかかりやすく、治してあげることも難しい

場合が多いです。でも、これまで動物園に貢献してくれた恩返しとして、少しでも快適な余生を過ごせるように、私たちはできる限りのケアをしていきたいと思っています。

